

宮城倫理経営塾は、二十四期目を迎えました。これまで四百名近くの塾生を送り出し、卒塾後も多くの塾生が県や単位倫理法人会の役職者として活躍しています。

塾生は本塾の、「①倫理経営を通して活力ある企業を創る」「②倫理運動を通して明るく豊かな地域社会を創る」「③倫理活動を通して未来を担う新進気鋭の人材を輩出する」という活動理念の下、カリキュラムには倫理経営講座にあたる講義「事業繁栄の倫理（みち）」、財務・SWOT分析、経営計画書の作成、富士研受講などがあり、集大成として創造性・利他性・人間性の三本柱からなる経営理念の策定を要します。

また塾生は期間中「非日常」への「挑戦」を通して、自身の「心ぐせ」と向き合い、自己革新を図ることが求められます。

ここでいう「非日常」とは、もちろん塾での経験を意味します。また日常生活の間を縫って多くの倫理実践に「挑戦」して、これまで積み重ねてきた「心ぐせ」（こだわりの・とらわれ・価値観・先入観といった概念）を見つめ直していくのです。

一方で、塾生が成長していく過程で援護射撃役を担っているのが、講座や塾運営に携わる宮城県倫理法人会所属の三十名以上にも及ぶ講師・運営スタッフ陣で、塾生と向き合い、時に叱咤激励やアドバイスを送り、塾生を全力でサポートしています。

そこまですて講師・運営スタッフ陣が塾生と向き合うのは、他ならぬ「教える側の立場」である自分自身が、ひたむきになっ



共に学び共に成長する 倫理経営塾の醍醐味

て自己革新を求めているからであり、その姿勢は「共に学び共に成長」する本塾のスタンスともいえるでしょう。

T氏は父親が創業した公共工事を請け負う建築会社の後継者として、今から十数年前に本塾に入塾しました。

当時、会社は長年続く不景気のあおりを受け業績低迷から抜け出せずにいました。

そのため入塾当初も「建築業界自体が低迷期だから」「親が作った借金だから」とあきらめの心境でいました。

しかしT氏には大勢のサポーターがいました。そして粘り強く向き合ってくれる講師・スタッフの後押しを得て「何のために誰のために企業が存在するのか」を徹底的に自問自答し、これまで漠然としていた自社の使命や方向性を経営理念に落とし込むことができたのです。

その後、T氏はリーマンショック、東日本大震災や事業承継など幾度となく岐路に立ちましたが、経営理念を拠り所に、これまでの公共事業メインの業態から住宅のリフォームや新築アパートの木造建築に特化するなど、変化を恐れずに苦境を切り抜けていったのです。

数年前よりT氏は塾の運営スタッフ陣に名を連ね、塾生とともに倫理実践を深めています。とりわけ「親とつながる」実践はT氏の心の成長を加速させ、事業繁栄の礎を築きつつあります。そして今期より塾頭に就任し、倫理経営を推進する模範企業を創るべく後進の育成に力を注いでいます。